

千江さんが
残した
1枚の写真

ここに1枚の写真がある。
千江さんが毎日のように通い、農作業に従事した農林業センター。そこで千江さんが撮影した「農作業の合間のひととき」の写真だ。そこには、はにかみながらカメラを見つめるたくさんの笑顔が写っていた。暑い夏の日も、寒い冬の日も、共に畑に向かった仲間たちだから自然に出る信頼に満ちた笑顔だ。こんなところにも残っていた「千江の輪」。

千江さんは、この町に大きな大きな「人」の輪を広げてくれた。広報担当の元にはしばしば、「わたしは千江さんに会ったことはないけれど、毎月の千江の輪コーナーを楽しみにしているんだよ」という声が届いた。千江さんの頑張る姿が、この町の人たちにしっかりと伝わって

いた証だろう。

千江さんはある日、「この町には良いところがいっぱいあるんです」と言った。そして何より自慢できるのは「人のつながり」だと言いつつ、わたしたちが当たり前だと思っている「人付き合い」が、千江さんの目にはとても新鮮に映っていたと言う。1年間、この町の住人として暮らし、この町の人とかかわり続けた千江さん。慣れない田舎暮らしの中で、平日は農作業に汗を流し、休日には地域の勉強会にも出席していた。イベントでは裏方として活躍し、地区の伝統行事にも積極的に参加した。毎日が新鮮な驚きであり、挑戦の連続だった。

悩んだ時期もあったそうだが、持ち前の明るさで乗り切り、地域を元気づけようと笑顔を振りまいて頑張っていた。そして千江さんなりの「まちづくり」の形を見つけ、最後にこの町の子たちに示してくれた。

今度はこの町に生きるわたしたち自身が、わたしたちの手で、この町を元気づけていく番だ。

千江さんがいつか、この町に帰ってくるその日まで――。

千江さんが残したものの。それは頑張る姿、笑顔、人と人をつなぐ「千江の輪」。

農林業センターにて。農作業休憩中に千江さんが撮影した1枚。写真からは、和気あいあいとした雰囲気伝わってくる。楽しそうな会話が今にも聞こえてきそう。千江さんのことを信頼しきっているからこそ生まれた1枚だろう。